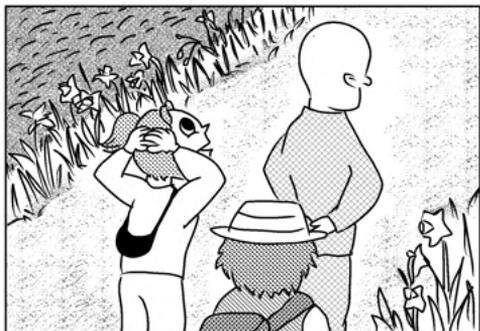


Ⅲ 里山の四季

第8条 春の女神



今が私の最も
好きな季節。
このヒスイ色も
数日すれば
濃い緑色になろう。

素敵だわ！
茶色の田んぼ、
ヒスイ色の丘陵、
銀嶺の立山と続いて
その上は真っ青な空、
まさに四重奏曲やわ。

「ヒスイの桃源郷」と
呼びたいほどじゃ。



ここは2万年以上前から
人が住み着いていて
ずーっと同じ景色を
見てきているんや
不思議やな。

Ⅲ 里山の四季



春に山菜
秋には彼らの
主食となる
ドングリ、栗を
はじめ、栗を
いろんな木の実が
採れたんや。

縄文人は
長い冬のあとに
このヒスイ色を見て
山の恵みをいただけ
季節が来たと思
ったんや。



だからこそ
めっちゃ硬いヒスイに
穴あけまでして
一番大事に
したんやと思う。

根性やあ〜

ヌオ〜



ここは空が
とつても広い。
雲の形も
いろいろで
面白いわ。

ホト
サイコ〜



都会のビル
の谷間から
狭い空と
は大違
いや。

剣岳や
大目岳から
昇る朝日は
荘厳の
一言じゃ。



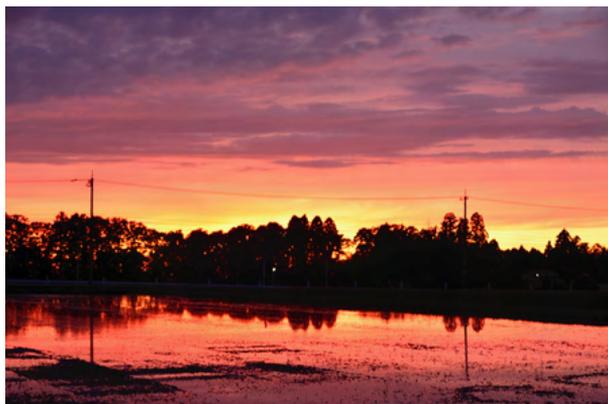
わあ、
この蝶々
めっちゃキレイやわ。
禪師、この蝶
なんて言うの？



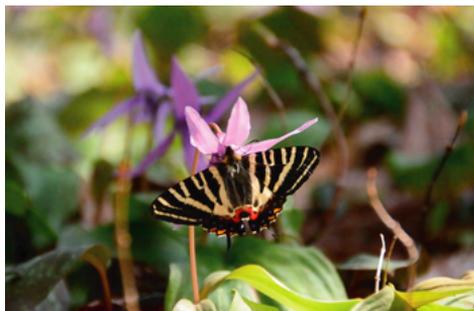
ヒスイの桃源郷と立山の四重奏



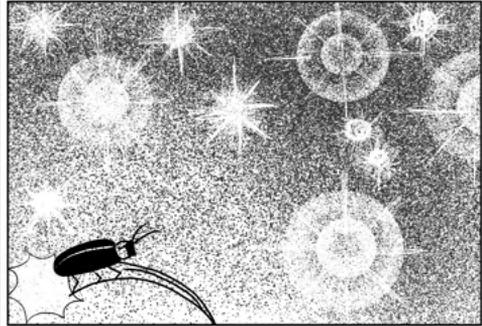
朝日と夕日のドラマ



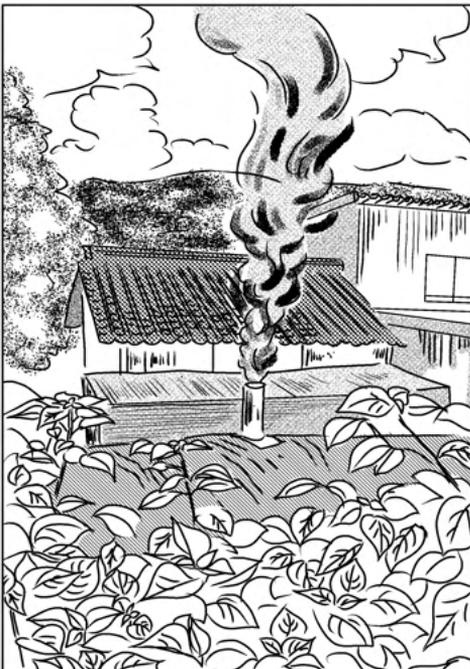
春の女神と妖精



第9条 夏の風物詩



Ⅲ 里山の四季





戻ってきたホタルの里

前後左右から優しいホタルの光に包まれると懐かしさが心に溢れる。亡き人の想いを伝えるかのようにゆったりと舞うホタルの光。



越中瀬戸焼を今に伝える陶農の里

良質な粘土が採れることから縄文時代以来1万年以上にわたり、土と炎への祈りにも似た「土器づくり」が続く新瀬戸。

越中瀬戸焼は経済性、合理性が求められる近代社会にあって膨大な手間暇のかかる、昔ながらの手法を守り続け、藁灰を使った自然釉づくりをはじめ、「巨人の肩」ともいえる先人たちの技術・ノウハウの上に築かれた職人の世界。作陶に必要な水と土とさまざまな材料の全てを与えてくれる立山の自然に感謝しながら、作家たちは土づくりから窯焚きまでを一人で完遂する。



陶農館の登り窯



越中瀬戸焼の作家たちが主催するかなくれ茶会

第10条 秋のワイルドドライブ

秋、二人は花柳寺を再訪した。

花柳寺

禅師、
お久しぶりです。

よう来た
ゆっくりして
いきなさい。

おすすめは
サトイモだよ。
とろけるような
感触があるんじゃないや。

来る途中、
モモ、ナシ、
ブドウが
たわわに
実ったり
しましたわ。

縄文からの遺産は
たくさんあるけれど、
我らは1万5千年後の
子孫に何が残せる
じゃろうな？

サトイモは
クロボクと呼ばれる
黒土で育つんや。
この土は
縄文時代の焼き畑に
由来するようやわ。

へえ！

Ⅲ 里山の四季





春に来た時は
よう、
カモシカや
イノシシを
見たわ。

ホンマに
ワイルドやな。

アフリカでは
ヒョウが
木の上で獲物を
狙っていて
とても
危険だったわ。



なんでも出てくるよ。

フクロウ

キツネ

タヌキ

イタチ



ここらでは
玄関から出る時に
手拍子をして
クマと鉢合わせに
ならんように
するんじゃよ。

ハムンガ

ハッ



去年はクマが
新瀬戸小の
校庭の真ん中に
フンをして
いったんじゃ。

ムラマシ

フン



動植物が共生する
緑豊かな里山
だからこそやな。

やっぱり都会では
想像もつかんこと
ばかりや。



Good morning!

ケニアのホテルでは
窓からキリンの
首が入ってきて
ビッグサプライズ
やったけど。

圧巻の紅葉

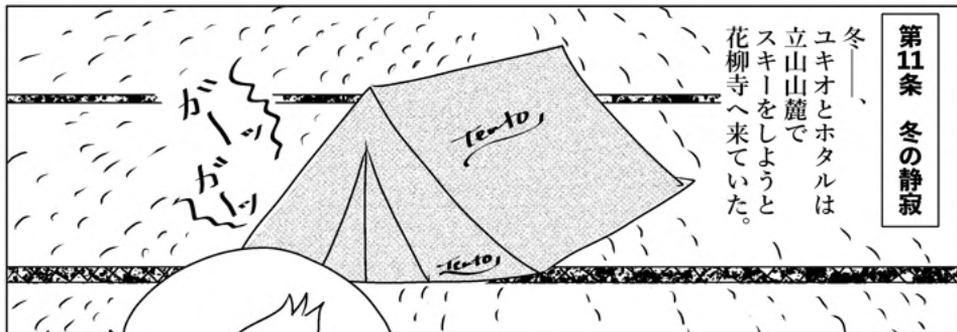


里山の生きものたち

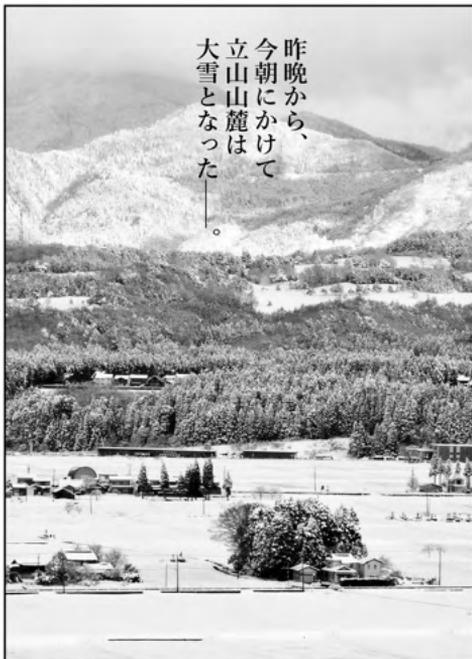


第11条 冬の静寂

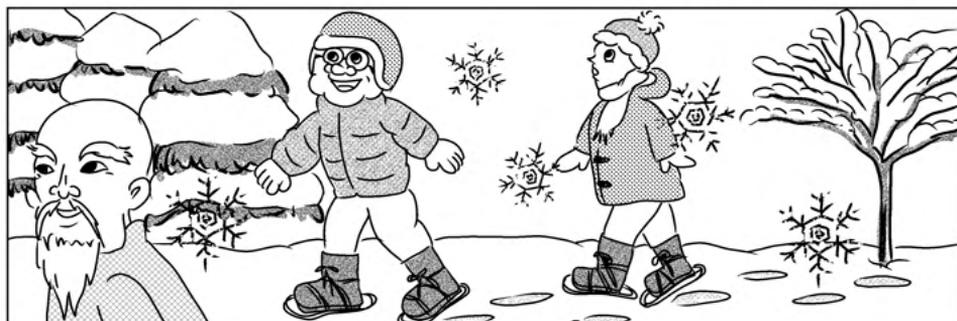
冬、ユキオとホテルは立山山麓でスキーをしようと花柳寺へ来ていた。



昨晩から、今朝にかけて立山山麓は大雪となった。



Ⅲ 里山の四季







すべての音が雪に吸い込まれる静寂の世界



